百々裏話（24）

おもてあきら

【風姿花伝の異本―元章注入本と田中本―】

『風姿花伝』は、世阿弥の伝書の中では最も著名であり、内容も具体的であったためか比較的伝本が多い。その中で、あまり世間に知られていない伝本の二・三について、その概要を紹介してみたい。

観世宗家に、『風姿花伝』の序と第一年来稽古条々のみを収めた無題の写本が所蔵されている。この本の特色は、本文の途中や末に注釈を加えていることで、たとえば、序の「ただ言葉いやしからずしてすがたゆうげんならんをうけたるを達人とは申べき哉」に、

　爰にうけたるとは、自然にうけたるをいふにあらず。まなびてうけたるをいへり。此言葉かんもん也。此一部みなつらぬけり。されば此言葉をわすれずしてすへを見るべし。

と注している如くである。

こうした注の加え方は、同じ世阿弥伝書の『習道書』に十六代（系図では十五代）の観世大夫元章が注を加え、明和九年の序を加えて刊行した本、いわゆる明和本『習道書』と同じ形である。その明和本『習道書』の「申楽の番数の事」の条の注に、

　此序破急の事は花伝書にくはし。追而その書に注をくはへてひろむべければ、それを見るべし。

とあるのを参照すれば、『風姿花伝』に注を加えた宗家所蔵本は、『習道書』と同様に観世大夫元章の手に成るものと認めてよいであろう。本文の書体も明和本『習道書』の本文とよく似ているし、本の年代も明和頃と見てよいようである。奥書などはないが、「元章注入本」と仮称しておきたい。

世阿弥伝書の元章の手に成ると認められる注を加えた写本として、『至花道』や『九位』も観世宗家に所蔵されているが、それらが未定稿の形であるのに対し、『風姿花伝』の方は、そのまま版下に流用し得るまでに浄書された形であり、元章は『習道書』に予告した通りに、続いて『風姿花伝』をも出版すべく準備していたであろう。出版とはいっても、世間に広く公刊しようというわけではなく、『習道書』と同様門弟などごく一部の人に配布する目的だったのであろうが、とにかく元章という人は面白いことを企てた人である。

―能―

木賊（とくさ）　早開之伝

シテ	尉	観世銕之丞
ツレ	男	鵜沢雅
〃	〃	若松宏充
〃	〃	遠藤六郎
ワキ	旅僧	宝生弥一
笛		寺井政数
小鼓		幸祥光
大鼓		吉見嘉樹
地頭		観世寿夫

〈休憩二〇分〉

―能―

道成寺（どうじょうじ）　赤頭

シテ	白拍子蛇体	観世静夫
ワキ	道成寺の住僧	鏑木岑男
笛		一噌幸政
小鼓		大倉長十郎
大鼓		亀井俊雄
太鼓		観世元信
地頭		観世寿夫

〈午後七時半頃　終演の予定〉

元章注入本の元章の注には、世阿弥の伝書研究という点からはさほど面白い意見もないが、世阿弥の伝書がどのように読まれてきたかを考える上では、甚だ参考になろう。二・三、例をあげておこう。

序の、「三重戒是古人拠也・好色・博奕・大酒」（前後が逆）の所の注は左の通り。

此三つは、能げいにかぎらず、すべての人の身をそこなひ、家をほろぼすもとなり。但し、是が中、好色はいたくふかからねばさまたげともならざるを、此書には第一とあげたるに心をつくべし。身をそこなひ家をほろぼしては能もならぬは三つながらかわる事なけれども、舞台に出立てのがひ（害）、ばくゑき、大酒は爰にはさまたげず。好色の心あれば、その方にひかれて、声もよわくなり、手ざし・足ぶみもしかとならぬもの也。ことに声がわりの頃は、当分の間をおもふより、ふしもそこね、声もくせづき、すべて好色の心、能のばの大きなるがひとなれば、是をまつあげたると覚ゆる也。

「好色」をさほど害がないものと考え、なぜそれを第一の禁制としてあげたかについて苦しい解釈を試みているあたり、江戸時代の大夫らしいのんびりした態度と言えようか。

また、「二十四五」の項の「さる楽にそばみたるりんぜつをし、いたりたる風躰をする事、あさましきことなり」に対しては、

そばみたるりんぜつとは、じやう法にそげてくはしきものまね成べし。いたりたるふうていとは、時のきやうにじやうじて、そくさに仕出る手などのたぐひ成べし。これらの事いまだはやしと、かくいましめたるなり。

と注している。「りんぜつ」「いたりたる」の解釈には誤まりもあろうが、具体的に注している点には、現在の注釈に欠けた味があって面白い。

元章注入本の『花伝』の本文は、その系統が少しく厄介である。世間によく知られている金春本・宗節本・吉田本の三本に関係づけていうと、第一年来稽古条々の部分は、明らかに吉田本系である。その事を示す文句を例示すれば、元章注入本の「十七八」の項に

調子はこゑによるといへども、わうしきらんけいまではもちゆべし。

とある所、小異はあるものの、吉田本とほぼ同文であり、金春本・宗節本には「らんけい」ではなくて「ばんしき」とあるのである。

また「二十四五」の項に「ここを三躰のは

K
FLORIST TEL. 402-2587
花の店

ケイフローリストの人たちは、花を商品としてよりむしろ自分たちと同じひとつの生命としてあつかう。花はいきものであるという、このあたり前なことを感じさせてくれる花の店は少ない。
ケイフローリストはそのような店のひとつである。
谷川俊太郎

贈物には電話ひとつで……　青山1丁目・乃木坂間 TEL. 402/2587
ケイフローリスト

じめとす」とある一句も、吉田本には同文が見え、金春本、宗節本にはない文句である。

ところが、序の部分だけは吉田本系ではないようである。吉田本（金春本も）に、

推古天皇の御宇に、聖徳太子、秦河勝に仰て……

とある所、元章注入本は「聖徳太子」が無く代りに「聖徳太子仰」と右に朱で傍記してある。これは宗節本と同じ形である。その他二ケ所にも、明らかに宗節本に基づいていると認められる文句がある。かと言って、元章注入本の序の部分はすべてが宗節本系でもない。宗節本に脱落している文句がちゃんと存在しているのだから……。結局のところ、序の部分は、吉田本に近い形の本文を、宗節本によって少しく改変したものであるらしい。

こころで、第一の部分は吉田本系の本文ではあるが、吉田本以上に元章注入本に近い本文を有する写本が存在している。田中允氏蔵の「華伝書」がそれである。この本は、『風姿花伝』と『花鏡』を合写した錯簡のある本の転写本と見えて、『花伝』と『花鏡』の本文が入りまじっているが、第二物学条々の一修羅」の途中までで終る『花伝』の本文も、冒頭部を欠く『花鏡』の本文も、ともに吉田本系である。この本の本文が元章注入本に最も近似し、「二十四五」の項に、吉田本ではただ人ごとにこの時分の花に迷て……

とある所が「…此時分のはなにして…」とあるのなど、両本にのみ見られる異文である。

この田中本が序の大半を欠いている（「稽古はつよかれ静謐はなかれと也」の一行のみを残す）ことと、元章注入本の序のみが吉田本系ではないこととの間には、何らかの関係がありそうである。元章注入本は田中本の親本を底本とし、それに序が欠けていたために、序の部分のみは別本を底本に採用した、といったような事情ではないかと推測しているが、まだ確信は得ていない。

一体、『風姿花伝』吉田本には、金春本や宗節本などとは著しく違った本文が散在しており、その性質には甚だ疑問が多い。私は吉田本を後人の改訂の加わった本であろうと推測しているが、元章注入本や、『花鏡』の本文からみて恐らく親本は観世家所蔵本であったろうと思われる田中本が、吉田本系の異文を持つ本文であることは、その改訂が観世家で行われたらしいことを思わせ、『風姿花伝』の本文系統考察上、両本ともに貴重な資料であると考えている

（38・8・24）

＜出演予定＞

9月5日（木）現代音楽祭（京都）で「柳慧氏の作品に出演（寿夫）

9月7日（土）和歌山市で舞囃子「智恵子抄」（静夫・片山慶次郎）

9月8日（日）米寿佐藤広吉翁祝賀素謡会 鏡仙会舞台で素謡「安宅物進帳」（鏡之丞・寿夫ほか鏡仙会同人一同）仕舞「高砂」（幸徳）「羽衣」（寿夫）「舟弁慶」（雅等

9月14日（土）北陸中日能（金沢市観光会館）で能「井筒物着」（鏡之丞）仕舞「熊坂」（静夫）

9月25日（水）試演の会（淡交会舞台）橋岡久馬氏の能「定家」の地頭（寿夫）

9月26日（木）東京能楽鑑賞会（水道橋能楽堂）能「恋重荷」（鏡之丞ツレ順之地頭寿夫）

10月1日（火）世阿弥生誕六百年記念芸術祭能第一日（日比谷公会堂）能「猩々乱」（寿夫・静夫）

10月5日（土）鏡仙会秋の別会（別掲）

10月6日（日）大阪梅猶会（寿夫）

10月8日（火）神戸能楽友の会 能「通小町」（寿夫）

10月13日（日）共楽会（鏡仙会舞台）鏡之丞門下のお弟子さんたち（素人）の素謡・舞囃子・仕舞・独吟等

10月27日（日）山口荷風会（鏡仙会舞台）山口幸徳門下のお弟子さんたち（素人）の素謡・仕舞・独吟等。